

伊波普猷と「同化」の暴力

—1910年前後の思想を考える—

三 筈 利 幸

はじめに

伊波普猷は1906年に東京帝国大学を卒業後、帰郷して沖縄初の「文学士」としての啓蒙講演活動を開始した。『伊波普猷全集』（以下『全集』と略す）第11巻巻末の「年譜」によれば、この年の10月28日に第一回琉球史講演が開催され、講演は次々に行われたことが伝えられているが、しかし、文字となつて残っているのは、その講演活動を伝える『琉球新報』の記事くらいで、そこで伊波が実際に何を語っていたのか詳細はわからない。それでも、1907年7月3日の『琉球新報』は、伊波が北谷尋常小学校で行った「琉球史に就て」という講演について、「上古史中古史近代史に別ちて琉球の開闢以来より廃藩置県に至る迄の順序を大体に於て述べ更に琉球開闢当時より尚巴志の三山一統に至る間の戦乱時代を説明」したと伝えていて、その内容の一端をうかがい知ることができる。

この記事にある講演の1ヶ月ほど後、1907年8月11日に南陽館で行われた沖縄教育会の席上で、伊波は「郷土史に対する卑見」という講演を行っている。それはのちに『沖縄新聞』に「郷土史に就いての卑見」という題名で掲載された。しかし、この「郷土史に就いての卑見」は、『全集』出版に際しても編者たちには未見とのことであった〔全集⑩：568〕。なるほど『沖縄新聞』は多くが失われてしまっており、私の知る限り、「郷土史に対する卑見」を新聞原紙で確

認することはできない^{*1}。しかし、調べてみるとたしかに原紙そのものの確認はできないが、沖縄県立図書館所蔵の「東恩納寛惇新聞切抜帳5」にかろうじてその「切り抜き」が残されていることがわかった。原紙から当該部分だけが切り抜かれ、几帳面に貼り付けられている。残念ながら日付ほかの情報は見あたらないが、原文はここで確認することができ^{*2}、この「郷土史に就いての卑見」は、1911年に単行本化された「琉球史の趨勢」あるいは同年「古琉球」初版の第2論文として収録された「琉球史の趨勢」とほぼ同趣旨のものであることがわかる。

そこで本稿では、1911年刊の「古琉球」初版所収の「琉球史の趨勢」を中心として使いながら、帰沖後、講演活動を行いやがて1910年には図書館長の職にも就くなど、まさに啓蒙家として活躍していた1910年前後の伊波の思想に迫りたい。しばしば「琉球史の趨勢」は、「古琉球」第一論文である「琉球人の祖先に就いて」と合わせて「日琉同祖論」が唱えられた論考と認識されている。もちろん、「日琉同祖論」も論じられてはいるのだが、「古琉球」初版の「琉球史の趨勢」では、伊波の同時代診断とでもいうべき「現代史」が語られていた。そこで本稿ではさらに考察を限定し、この伊波の語る「現代史」から、伊波が自身の生きていた明治期をどうとらえていたのか、そしてそこで唱えられた「日琉同祖論」はどういう意味をもつのかを考えたい。

1 消えた現代史

「反復帰」「反国家」の思想を展開した新川は、伊波の「日琉同祖論」を「同化」あるいは「同化＝皇民化」としてとらえ[新川1973:343]、手厳しく批判している^{*3}。もちろん、ベトナム戦争が続くなか米軍基地が残されたままでの「復帰」を「日本民族の統一」などと呼ぶことの欺瞞は、新川が指摘したとおりであり、またさらに1970年前後というかなり早い時期に「国民国家」批判を展開した新川の仕事は正当に評価されなければならない^{*4}。しかし、新川が伊波の

思想を——伊波の沖縄学についての業績は認めながらも——「同化」の論理としてしまうことで、伊波の思想のひだのようなものまで切り捨てることになるとすれば、それは彼のおもろ研究をはじめとした沖縄学を正当に評価するという点からみてもマイナスであろう。

ただし、新川によってなされた同化主義という批判は、今日手に入る『古琉球』*⁵をみればなるほどの外れではないようにもみえる。鹿野正直にしたがって『古琉球』を8群のパートに分けて考えれば[鹿野1993: 75-6]、その1群目にあたる第1論文から第4論文までは、次のような構成になっている。第1論文「琉球人の祖先に就いて」、第2論文「琉球史の趨勢」で「日琉同祖論」が言語、文化、歴史などから多角的に論じられ、その上で第3論文「沖縄人の最大欠点」では、沖縄人が恩を忘れやすく「姉妹主義」「御都合主義」[全集①: 65]に陥っていることを厳しく指弾、さらに第4論文「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」では、「廃藩置県を歓迎し、明治政府を謳歌する」として、「廃藩置県は琉球社会発達史上の一大時期である」と絶賛しているようにみえる[全集①: 68]。そう読めば、なるほど新川による同化主義という批判が正鵠を得ているようにみえてくる。

しかし、『古琉球』は1911年に発表され、幾度もの改訂を経ているという事実をふまえてみるとどうだろうか。1911年発表の初版と1916年の再版、1922年の三版と版が変わるごとに論考の追加や削除あるいは口絵の追加など、同じ『古琉球』でもその様相は随分変わっていつている*⁶。ようやく1942年の改訂初版で現在われわれが目にするような『古琉球』のかたちとなった。

では、「琉球史の趨勢」についてはどうか。すでに指摘したようにこの論考は、1907年「沖縄新聞」掲載の「郷土史に就いての卑見」をもとに、1911年に「琉球史の趨勢」と題されて単行本化され、同年すぐに『古琉球』初版の第2論文に入れられた。さらに、その後、1916年再版、1922年第3版と続くが、基本的に本文には大きな変更はない。しかし、1942年の改訂初版では大きく改訂がなされた。とくに本稿で注目したいのは、論考末尾の一節——伊波自身が「終

りに臨んで」と切り出している最終部分——がごっそり削除されたという事実である。

この「琉球史の趨勢」末尾には、なるほど「古琉球」という題名の著作に収めるには、そこから逸脱する時代についての記述があった。論を進めてきた後に伊波は次のようにいう。

終りに臨んで、私は明治十二年以来日本政府が如何に琉球を^{ソシャライズ}社会化したかといふことを述べ、ついでに教育家諸君に対して私の希望を述べようと思ひます。〔初版：93〕

みられるように、「古琉球」という題名とは違ってまさに現代史を語っている。いや、伊波は現代史を語り、その眼前に広がる沖縄の現在を語っているのである。これ以降の部分が、改訂初版では削除されてしまった。そこで、節を改めて、この「消えた現代史」とでも呼ぶべき箇所には何か書かれていたのかを探ってみたい。

2 明治政府批判

先に引用した箇所では伊波がいう「社会化」とは「或社会が個人若しくは群の一体若しくは他の社会を化して自個の社会の成分若しくは部分となす事業」のことであり、それが「自衛的」であるものと「他攻的」であるものと二つに分かれるという〔初版：93-4〕。まず伊波はこの「自衛的社会化」について次のようにいう。

「日本国の建国以前に南島に分かれて来」た沖縄人は、「日本人の一支族」ではあるが、やがて沖縄人は日本国を「親しむといふよりは寧ろ畏れる」ようになった〔初版：94〕。

いちめる人をこわいと思ふのは人間自然の情であります。[初版：94]

この一文には日本（あるいは薩摩）と沖縄とのそれまでの歴史が凝縮されて示されているだろう。ここをもって伊波は「日本国民の三省しなければならぬ点と思ひます」[初版：94]と述べる。「いちめる」日本に対して、沖縄人を保護誘導する尚家に親しみを感ずるようになるのは道理であり、だからこそ「琉球処分」後は、尚家によって「自衛的社會化の基礎を揺がし存立の要性を弱むるが如き外来の勢力に対して之に抗拒する所以の方法勢力となるべき自衛的社會化を講じたのは人情として已むを得ざる所であつた」[初版：95]という。日本とのこれまでの関係から「畏れ」を抱いていた沖縄人に、「琉球処分」に際して尚家が「日本の社会と接触するに際し個人の疏通からして其統一及び鞏固の幾分弱めらるゝを補ふ為に一方に於ては沖縄人の内地人に接触するのを禦ぎ、他方に於ては理想的に旧社会の扶植宣揚を期せしめ、飽くまでもその數百年來の少朝廷を維持せむと力めた」[初版：95-6]のは無理もない。しかし、それでもなお「琉球処分」は次のような結果へと至る。

何人も大勢に抗することは出来ぬ。自滅を欲しない人は之に従はねばならぬ。一人日本人化し二人日本人化し、遂に日清戦争がかたづく頃にはかつて明治政府を罵つた人々の口から帝国万歳の声を聞くやうになりました。

[初版：96]

尚家は自らの地位を守るために「自衛的社會化」を行おうとしたのであるが、沖縄人は「自滅」しないために、尚家ではなく圧倒的権力をもつ明治政府へとなびいていくこととなつたのである。これを「自衛的社會化の結論」[初版：96]とみた伊波は、さらにこの後、沖縄には「他攻的社會化」がなされていくという。

この「他攻的社會化」には積極的、消極的の二種類があるという[初版：

97]。積極的な他攻的社会化は、「通例単に社会化と申して、自個以外の社会を化して、自個社会の完全なる部分となす事」[初版：97]である。それは、その社会間に「血縁及び社会状態の関係」を形成するという方法、つまり、通婚などによって社会的な融合をなすという方法によって達成される。それに対して、消極的他攻的社会化は「国性剥奪」[初版：98]であり、日本政府が沖縄に対して行ったのはこれであると伊波は断ずる。

日本政府は即ち琉球王国を廃して其国家制度を滅却せしめ、風俗習慣制度等を滅却せしめようとしたのであります。衆人社交性の調子の整一を攪乱させて社交性を薄弱ならしめたのでありますその理想的社会性を攻撃して一敗地に塗れしめ、意識的社会性を攪乱し麻痺せしめ、社会性の意識の衆人に存するなきに至らしめ、遂に社会性の自然的存在を滅却させようと力めたので御座います。[初版：98]

ここに伊波の日本政府批判は頂点に達するといつていいだろう。琉球王国を廃すること、つまり、「琉球処分」は沖縄の社会性を剥奪する、まさに「国性剥奪」であると伊波は厳しく批判している。

しかし、この伊波の日本政府批判、それはとりもなおさず「琉球処分」批判は、彼のほかの箇所での発言と齟齬をきたしているようにみえる。たとえば、伊波は第4論文「進化論より見たる沖縄の廃藩置県」で、「半死の琉球王国が破壊されて、琉球民俗が蘇生したのは寧ろ喜ぶべきことである。我々は此点に於て廃藩置県を歓迎し、明治政府を謳歌する。」[初版：115-6]という箇所は、これだけ読めば「琉球処分」を肯定し、明治政府を絶賛しているかにみえてしまう⁷⁾。さらに、現在の版では、「琉球処分」や日本政府を批判しているこの「琉球史の趨勢」末尾部分がすべて削除され、伊波が明治政府による「琉球処分」をいよいよ肯定的にとらえているかのようにみえる構成になっている。

それでも、伊波が1910年前後の講演で語り、『古琉球』初版に書いたところに

は、痛烈な「琉球処分」批判、明治政府批判が存在した。「いぢめる」という言葉で表現されるような日本と琉球の関係は、「琉球処分」後にも改善されるどころか、「国性剝奪」という様相を呈していく。ではなぜ、伊波は「いぢめ」られ、「国性剝奪」までされる日本との関係を、「日琉同祖論」によって結び結ばなければならなかったのか。「琉球処分」を批判するだけでなく、肯定的な言辞によってもまた表現せざるをえなかったのか。それを伊波のいう「無雙絶倫」という議論から考えてみたい。

3 ユニークネス 無雙絶倫と個性

以上のように「琉球処分」や明治政府を批判した伊波は、しかし、いっぽうで「日琉同祖論」を唱えていた。すなわち、彼は「琉球処分」を完全に否定し去ることはしておらず、むしろ、それを「積極的」に評価しようとしている。こうした、一見矛盾する主張をしたかにみえる伊波をどう理解すればいいのだろうか。

これまでみてきた箇所が続くところで、伊波はさらに明治政府批判を展開している。それはまずは、日本と沖縄に共通する点——伊波の言葉では「一致してゐる点」——を無視してきたということについてである。具体的にそれが何を指すのかについては伊波は語っていないが、そもそも「沖縄人が他府県人と祖先を同じうするといふ事」〔初版：62〕からして、少なくとも「同胞」と取り扱われてしかるべきところを薩摩の琉球侵攻以来続く「奴隸視」があったことから発せられた批判だと考えられよう〔初版：64〕。伊波は続いて次のようにいっている。

私は沖縄人がこの一致してゐる所を大に発輝せせるといふことは即沖縄人をして有力なる日本帝国の一成分たらしむる所以のものであらうと存じます。〔初版：100〕

ここにいう「日本帝国の一成分」とは、「他府県人」と「同祖」である沖縄人が、日本帝国のなかで対等に扱われるべき存在であるということを示している。つまり、「日琉同祖論」は、かつて新川明が批判したような沖縄人の日本人への「同化」ではなく、むしろ「同祖」であるがゆえに「他府県人」も沖縄人も同等に遇されるべきであるという主張へ結びついていることがみてとれるのではないだろうか⁸⁾。

次に伊波は、この「一致してゐる点」だけでなく、「一致してゐない点」を發揮させることの重要性を説く。これまでのように「琉球固有の者をかたづけしからぶちこはさうとする人があつたら、これとりもなをさず、両民族の間に於ける精神的連鎖を断切る」[初版：100] ことになるという伊波は、沖縄の「無雙絶倫」を無視した明治政府のあり方を批判している。伊波はこの「一致してゐない点」を「他人がまねることの出来ない点」といい直した上で、次のように述べる。

各人がもつてゐる所の個性は無雙絶倫であります。即ち各人は神意を確實に且つ無雙絶倫なる状に発現せる者であります。換言すれば各個人はこの宇宙にあつて他人の到底占め得べからざる位置を有し、又他人によつて重複し得らるべからざる状に神意を発現するものであります。(ロイス氏「世界と個人」参照) 此に由つて之を觀れば天は沖縄人ならざる他の人によつては決して自己を発現せざる所を沖縄人によつて発現するのであります。即ち沖縄人微りせば到底発現し得べからざりし所を沖縄人によつて発現するのであります。個性とは斯くの如きものもあります。沖縄人が日本帝国に占むる位置も之によつて定まると存じます。[初版：100-1]

こうした「無雙絶倫」をなくしてしまえば、それは「精神的に自殺した」と同じであると伊波はいう [初版：101]。

この「無雙絶倫」という指摘から、後の伊波の沖縄学への没頭という姿勢が

みえてくる。沖縄固有のものを「かたつばしからぶちこはそうとする」ことに異を唱え、この「個性」をなくしてしまえば「精神的な自殺」を意味するとまでいう伊波。ここには単に学問的な関心だけでなく、彼の学問を突き動かすアイデンティティ問題がある。沖縄とはいかなるところなのか。自らを、そして自らの生まれた沖縄をどう位置づけるのか、という問いは、伊波の生涯のテーマとなっていく。伊波は、沖縄の個性、固有性に固着しながら、その上で「日琉同祖論」を語っている。すでに指摘したように、伊波は「日琉同祖論」によって日本と沖縄の位置の対等性を要求し、それでいて「日本帝国の一成分」としては、決してその「無雙絶倫」を失わない、個性的な存在としての沖縄人という「日本帝国に占むる位置」を確保しようとしているのである。

明治政府は、「琉球処分」以降、同化政策を「文明」という名の下に行っていた⁹。つまり、頑迷で固陋な沖縄を「内地の文明」に「同化」という理屈で同化政策が行われていったのである。これは「何よりも教育の面で実施された」[石田2000:72]という指摘を読めば、この「琉球史の趨勢」が、そもそもどこで、だれに向かってなされた講演をもとにしているかということを思い出さずにはいられない。伊波の講演「郷土史に対する卑見」は、1907年8月11日沖縄教育会の席上でなされたものである。また「古琉球」初版所収の「琉球史の趨勢」末尾は、教育への希望——「教育家諸君に対して私の希望を述べようと思ひます」[初版:93]——を語っている箇所である¹⁰。多少長いが引用しよう。

それから近來為政者や教育者が自らその功績を述立てることが流行しますが、それは被教育者の口で謳歌せらるべきものと存じます。よしや自分を満足せしむべき謳歌の声を聞かずとも、自分が養成した所の人物はとりもなほさず活ける勲章であるといふ丈けで満足して貰ひ度いのであります。成程僅々三十余年にして沖縄をこれまでに立派な沖縄にして戴いたのは有難い。沖縄人如何に健忘性なりとは雖、忘れることの出来ない所でありませう。併しながら吾々の方にもかうなるべき個性があつたといふことを少し

は言はせて貰ひ度いのであります。為政者や教育者が如何に偉くとも、沖縄人がアイヌや生蕃と同じ程度の人民であつたら、三十余年にしてかういふ成績を見る事はとても出来ないだらうと存じます。かつて米国人がアメリカの土人を劣等民族として輕蔑して取扱つた頃には彼等の中から何等の人物も出なかつたさうですが、米国人が教育の方針を一変して、彼等を自分等の同胞としてその人格を尊敬して教育して以来、彼等の中から学者も政治家も詩人も踵を接して出たとのことであります。〔初版：104-5〕

「劣等民族」と見なした上での教育は功を奏することはなく、教育の方針を一変させ、「自分達の同胞としてその人格を尊敬して教育」することではじめて高い見識をもつ人物を輩出することができるという主張は、沖縄人を「奴隸視」した上で「文明」化しようとする同化政策への痛烈な批判となっている。こうした文脈で考えれば、伊波の「日琉同祖論」は、同化政策をその根本で拒否し、まさに伊波の沖縄人というアイデンティティを確保する役割を果たしているといえよう。

4 「ピープル」と「ネーション」あるいは包摂と排除

以上のように、「日琉同祖論」を「同化」の論理ではなくむしろ「同化」を拒否するものであるととらえる^{*11}と、伊波が明治政府の同化政策には、「同化」という包摂の作用とともに排除の暴力も同時に働いていたことに敏感に気づいていたとさえ考えられる。もちろん、それは危ういかたちで表明され、同化政策を拒否しながら同化政策に加担せざるをえないという隘路に伊波を追い込んでいくことになる。結論めいたことを書いたが、この点について以下で考えてみたい。

伊波は、アイヌに対して次のように述べている。

アイヌを御覧なさい。彼等は、吾々沖縄人よりも余程以前から日本国民の仲間入りをしてゐます。しかしながら諸君、彼等の現状はどうでありませう。やはりピープルとして存在してゐるではありませんか。不相変態と角力を取つてゐるではありませんか。[初版：92]

ここに伊波のアイヌ蔑視があることは見紛うべくもない。いっぽうで伊波は沖縄人を次のように評価する。

琉球処分は実に迷児を父母の膝下に連れて帰つた様なものであります。ところが此琉球民族といふ迷児は二千年の間支那海中の島嶼に彷徨してゐたに拘はらず、アイヌや生蕃みた様にピープルとして存在しないでネーションとして共生したので御座います。[初版：90]

アイヌが「ピープル」であるのに対して、沖縄は「ネーション」である。ここで「ピープル」とは、ずっと以前から——戸籍法が公布された1871年から——「日本国民の仲間入り」をしていながら、日本「国民」たり得ていない人びとを指し¹²、「ネーション」とは、まさにその日本「国民」たり得る者を指していると考えていいだろう。沖縄人は「首里を中心として政治生活を営み」、「おもろさうしを遺し」また「マラツカ海峡の辺まででかけ」もし、アイヌにはなかった「自国語で金石文を書くことさへなした」沖縄人は、「実に物質的にはた精神的に国家社会を形成すべき能力を有してゐた」と伊波はみている。伊波が、二千年もの間「日本」と「沖縄」は別々にあったが、沖縄は決して「ピープル」に墮すことなく「ネーション」として「日本」と「共生した」と主張するとき、ここにも「日本人」と「沖縄人」との対等な立場の主張を読みとることができる。

しかし、繰り返すが、伊波のアイヌや生蕃への差別意識は歴然としている。沖縄人を位置づけるに際しては、彼らとの差異化がなされる。この点については伊波の限界であり、指摘され批判されて然るべきである。伊波が1925年に第

2回東京アイヌ学会に出席し、遑星滝次郎と出会うことで、自分のアイヌ理解が偏見に満ちたものであったと悟ってアイヌ観を大きく変更していったことはよく知られているが^{*13}、しかしはたしてどこまで自身の差別意識を対象化し克服していくことができたのかについては、また別に考察しなければならない。

こうした問題があることは十分ふまえた上で、もう一度伊波がアイヌについて語っているところを読み込んでみたい。伊波によればアイヌは沖縄人よりもずっと前に「日本国民の仲間入り」をしていた。1871年の戸籍法公布によってアイヌは「日本国民」に編入されていったのに対して、沖縄は1879年の「琉球処分」ののちもいわゆる旧慣温存政策が実施され、日本の法制度が実質的に施行されるのは1896年からである^{*14}。アイヌに対する同化政策は明治政府成立の最初期から始まり、1899年には「北海道旧土人保護法」が成立、そこでは「同化」が「文明」化あるいは「開化」の名の下に正当化された。つまり、「北海道旧土人」を「開明の民」とするという大義名分のもとにアイヌ文化を「野蛮」として否定——たとえば男子の耳輪や女子の入れ墨を「陋習」として厳禁——したり、「旧土人」という呼称を使ったり、あるいは創氏の強制が行われていったりした^{*15}。

このように、伊波の眼前にはアイヌに対する明治政府の同化政策の様子が広がっていた。もちろん、1903年の人類館事件も伊波は十分承知している。「同化」とは、包摂されながらしかし排除されていくというものだということを、「日本国民の仲間入り」と「不相変態と角力を取つてゐる」という表現で伊波があらわしたとすれば、だからこそ沖縄に対する同化政策には抵抗しなければならないという意識が生まれ出てきたと考えることができるだろう。すでに「ネーション」としての「無雙絶倫」「個性」を持ち合わせている沖縄人から、「日本国民の仲間入り」をすることで「国性剝奪」つまり「ネーション剝奪」がなされるという目の前に迫った危機——それは沖縄人というアイデンティティの危機でもある——に、伊波は対応しなければならなかった。なるほど、伊波は「同化」を根本において拒否したが、「日琉同祖論」を唱えるがために「日本」と「沖

「縄」以外の、より周縁におかれる者への言及を不可欠としてしまった。別の文脈で伊波は、「琉球は長男、台湾は次男、朝鮮は三男」と述べたと比嘉春潮が伝えている^{*16}が、こうした序列化をすることによってしか、沖縄を救い出すことができない道へと入り込んでしまったことは否めない^{*17}。伊波が「同化」という包摂／排除の暴力から逃れようとする、かえってその包摂／排除の枠組にとどまらざるをえなかったという「沖縄人が日本帝国に占むる位置」がここにある。

ここまで、「日琉同祖論」は、単純に「同化」を主張するものではなく、「同化」への拒否を根本において主張するものであるということを論じてきた。「琉球史の趨勢」末尾部分では、「日琉同祖論」が沖縄の日本への「同化」を拒否しながらも、「同化」を拒否するためにはより劣位にあるものを確定し、そこへと「同化」の暴力を向けさせざるをえないと考えた伊波がみえてくるといっていいたいだろう。それが伊波の限界だというのは簡単だが、ここにある日本の帝国支配の暴力性を見逃してはなるまい。「同化」による包摂／排除という暴力に曝される者が、それに異を唱えようとする、自らが否定しているはずの包摂／排除という暴力に加担させられてしまうという暴力性。それは支配する側がつくり出す帝国秩序の暴力に、さらに支配される側がその秩序強化に貢献する暴力を生み出す構造になっている。伊波の「日琉同祖論」を追うことで、伊波という思想家が「同化」に翻弄される様子がここにあらわになった。

おわりに

歴史はこの後いわゆる同化からさらに皇民化へと進み、沖縄戦へと向かっていく。また、すでに指摘したように、本稿で中心的に論じた『古琉球』所収「琉球史の趨勢」の末尾部分は1942年になるとすべて削除されてしまう。それは危ういしかたではあったとはいえ、はっきりと示されていた伊波の日本政府批判あるいは同化＝皇民化政策批判が抹消されてしまったことを意味する。伊波は

生涯にわたって「日琉同祖論」を唱えたとはいえ、本稿であきらかにした意味での「日琉同祖論」をいったいつまで堅持したのか、それは変節してしまったのか、そうであればそれはいつからなのか、はたまた「日琉同祖論」がのちの歴史的展開にどういう意味をもったのか等々、この改訂については多くの論すべき問題が残されているが、それらについては他日を期したい。

凡例

伊波の著作、論文について、服部四郎・仲宗根政善・外間守善編『伊波普猷全集』（全11巻、平凡社、1974-76年）から箇所した場合には、引用箇所は巻数を丸数字、当該ページを算用数字を使って、たとえば【全集①：245】のように記した。また、また『古琉球』初版（沖縄公論社、1911年）にかんしては、引用箇所は「初版」と略記した上で当該ページを記し、たとえば【初版：31】などのように示した。それ以外の場合は、名前、出版年、ページの順に、たとえば【新川19773：25】と記した。

なお、引用にあたっては私の責任で旧漢字は新漢字に、変体仮名は通常の仮名に改めている。

参考文献

- 新川明 1971=1996 『反国家の凶区——沖縄・自立への視点』社会評論社。
新川明 1973 『異族と天皇の国家——沖縄民衆史への試み』二月社。
石田雄 2000 『記憶と忘却の政治学——同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店。
伊波普猷（三宮利幸編） 2008 「沖縄人の祖先に就て」九州国際大学教養学会『教養研究』第15巻第1号。
榎森進 2008 『アイヌ民族の歴史』草風館。
大田昌秀 1976 『伊波普猷の思想とその時代』外間守善編『伊波普猷 人と思想』平凡社。
小館英二 1998 『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復讐運動まで』新曜社。

- 奥山恭子 2009 「明治31年民法・戸籍法施行と沖縄の戸籍事情」『横浜国際社会科学研究』第14巻1・2号
- 鹿野政直 1993 「沖縄の淵——伊波普猷とその時代」岩波書店。
- 近藤健一郎 2003 「近代沖縄における教育と国民統合」北海道大学出版会。
- 当山昌直・下地智子 2003 「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノート」沖縄県教育委員会『史料編集室紀要』第28号。
- 当山昌直 2004 「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノートⅡ」沖縄県教育委員会『史料編集室紀要』第29号。
- 当山昌直 2005 「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノートⅢ」沖縄県教育委員会『史料編集室紀要』第30号。
- 徳田匡 2008 「反国家・反復帰の思想を読みなおす」藤澤健一編『沖縄・問いを立てる—6 反復帰と反国家——「お国は？」』社会評論社。
- 富山一郎 2002 「暴力の予感——伊波普猷における危機の問題」岩波書店。
- 比嘉春潮 1973 「比嘉春潮全集 第五巻」沖縄タイムス社。
- 比屋根照夫 2009 「戦後沖縄の精神と思想」明石書店。
- 福岡良明 2003 「辺境に映る日本——ナショナリティの融解と再構築」柏書房。
- 福岡良明 2005 「同祖」のなかの「抵抗」——日琉同祖論の変容と沖縄アイデンティティ 城達也・宋安鐘編『アイデンティティと共生の再構築』世界思想社。
- 藤澤健一 2000 「近代沖縄教育史の視角——問題史的再構成の試み」社会評論社。
- 三宮利幸 2009 「伊波普猷の「日琉同祖論」をめぐる——初期の思想形成と変化を追う試み(1)」九州国際大学社会文化研究所『社会文化研究所紀要』第62号。
- 與那覇潤 2009 「翻訳の政治学——近代東アジア世界の形成と日琉関係の変容」岩波書店。

注

- *1 鹿野も『琉球史の趨勢』は、「一九〇七年八月十一日、沖縄県教育会の席上で述べた「郷土史に就ての卑見」に多少の訂正を加えたものとある。が、その所載紙『沖縄新聞』が発見されていないので、初出との異同を追うことはできない。」〔鹿野1993:94〕と述べている。なお、『沖縄新聞』をはじめとする戦前期に発刊された沖縄の新聞の現存部分や保存状態あるいは保存場所については、当山・下地2003、当山2004、当山2005に詳細なリストがある。
- *2 沖縄県立図書館に所蔵されており、だれでも閲覧、コピーすることができる状態にある。しかし、沖縄県立図書館に紙媒体でのみ所蔵されている現実から

考えて、広く多くの人がアクセス可能というわけではまったくない。そこで、私は本紀要の次号に、その原文を復刻して広く一般の利用に供する予定である。

- * 3 新川の伊波普猷批判は随所にみられるが、たとえば次の箇所は、比嘉春潮の「証言」を引きながら、日琉同祖論を同化主義だと断定している。

一九一一年(明治四十四)、二十九歳の比嘉春潮は、四月二十九日の「日録」でつぎのように書いている。／「琉球人種論、説了。日本人種であるとの結論。伊波先生の特論である。併し先生がなぜこんな論を公にせらるるかに就いてはわけがある。」／その「わけ、とは何か。比嘉春潮はさらにつづけてつぎのように書く。／「先生の考えでは、今の琉球人は早く日本人と同化するのが幸福を得るの道である。其ために右の様な論をする。向象賢や蔡温、宜湾朝保と云う人々も、決して日本びいきの人でない。寧ろ支那崇拜の思想を持って居た。併し万人の幸福のために同種族論を唱えて居た。伊波先生はもちろん支那崇拜ではないが琉球人を文明人として恥ぢざる人種……として種族的自尊心を持って居られる。……それで自分でも時々琉球人は大義名分を唱うべき境遇でない、今こそ日本人と同種と云うて居るが、如何なる時勢の変によりて、沖縄の指導者を以て任ずる人の口から支那同族論が唱えられるか知らぬと。」／ここではっきりといわれているように、伊波普猷にとっての「同祖論」は、沖縄人を日本人に同化させるための唯一の便法であった。沖縄人が「幸福。を得る唯一の道だ」と考えてのことであった。そこに伊波の思想の悲劇的な弱さと限界があった。[新川1973: 339]

その他、新川1973、新川1996所収の諸論考を参照。

- * 4 新川の仕事についてはたとえば小熊1998、徳田2008などが論じている。
- * 5 岩波文庫版は1943年刊の改訂初版が底本であり、「全集」版は1943年刊の改訂三版が底本となっているが、改訂初版と改訂三版はほとんど同一である。ただし、岩波文庫版では、本来巻末にあった「校注「混効験集」」は割愛されている。
- * 6 改訂の様子については、「全集」第一巻所収の「解題」[全集①: 532-7] 参照。
- * 7 「古琉球」初版にはないが、再版、三版では「琉球処分は一種の奴隷解放なり」という論考が加えられ、伊波が「琉球処分」や明治政府を肯定的に評価している印象がいっそう強くなった。
- * 8 伊波の「日琉同祖論」を同化ではなく、むしろ同化への抵抗として読み込む

解釈は、たとえば小熊1998、富山2002、福岡2005などで展開されている。注11を参照。

- * 9 たとえば小熊1998や石田2000などを参照。
- * 10 伊波が教育について語らなければならなかった当時の沖縄の状況については、近藤2003、藤澤2000が参照されるべきである。
- * 11 新川にみられるように、しばしば「同化」の論理としてとらえられた伊波の「日琉同祖論」を、同化思想とは異なるものとしてとらえようとした研究に、富山2002、福岡2003、福岡2005、比屋根2009、與那覇2009などがある。これらの先行研究に多くのことを学ばせてもらったことはいまでもなく、ひとつひとつについて細かく論じるべきではあるが、それはまた別の機会としたい。また、本稿とあわせて伊波（三笠）2008や三笠2009も参照されたい。
- * 12 アイヌについては、たとえば榎森2008を参照。なお、榎森は、アイヌの戸籍への登録について次のようにいう。

アイヌの戸籍への登録、「日本国民」への編入の問題で見落としてはならないことは、それがアイヌ民族の民族文化の否定策や倭人への同化策のみならず、新たな身分差別策と平行して行われたということである。【榎森2008：389】

- * 13 伊波のアイヌ観の変更は「目覚めつつあるアイヌ種族」（『沖縄教育』第146号、『全集』第11巻収録）にみるできるとされる。たとえば、『全集』に付された「解題」では、この論考は次のように紹介されている。

又吉康和宛書簡の形式。大正一四年三月一九日夜、東京の永楽クラブで開かれた第二回東京アイヌ学会に出席した伊波が、金田一京介の「アイヌの現状」、遼星滝次郎の「ウタリ・クスについて」の講演をきいて感激し、その後遼星との交際から自覚した若きアイヌの活動を知ってその運動に心から賛同し、自分達沖縄人がアイヌを甚だしく誤解・蔑視していたのを正そうと、郷里の人びとに呼びかけたもの。末尾に（大正一四年五月一日メーデーの夜）とある。【全集⑩：440】

- * 14 沖縄の戸籍に関しては、たとえば奥山2009などを参照。
- * 15 以上、アイヌに対する同化政策については榎森2008、とくにその388ページ以降を参照。
- * 16 1910年の韓国併合について、比嘉春潮は次のように記している。ここで「人

は曰く」と書かれている「人」とは、伊波のことである。

去月二十九日、日韓併合。万感交々至り、筆にする能はず。知り度きは吾が琉球史の真相也。／人は曰く、琉球は長男、台湾は次男、朝鮮は三男と。嗚呼、他府県人より琉球人と輕侮せらるる、又故なきに非ざる也。／琉球人か。琉球人なればとて輕侮せらるるの理なし。されど理なければとて、他人の感情は理屈に左右せらるるものにあらず。矢張吾等は何処までも〈リギ人〉なり。ああ琉球人か。されど吾等の所謂先輩は何故に他府県にありて己れの琉球人たるを知らるるを恐るるか。誰か起ちて〈吾は琉球人なり〉と呼号するものなきか。かかる人あらば、我は走り行きて其靴のひもを解くべし。[比嘉1973：192]

この比嘉の日記からうかがえるのは、当時の沖縄の位置である。比嘉は沖縄が「他府県」と同様に「沖縄県」であり、日本に包摂されていながら、どこまでも〈リギ人〉として排除されていくことを歎いている。伊波の言葉として引かれたところには、琉球に台湾と朝鮮がならぶ。もちろん、ここには台湾や朝鮮への差別的な眼差しがはっきりみとれる。しかし、台湾や朝鮮とあえて序列化しなければならなかった現実があったことも同様にたしかである。こうした点については富山が詳しく論じている。富山2002のとくに第2章参照。

- *17 近藤2003も藤澤2000もは、日清戦争後に植民地となった台湾を沖縄の同化政策に利用する言説が出てくると指摘している。多少長くなるが、近藤2003から引用しておきたい。

こうした状況で、沖縄県知事奈良原繁が大和化を推進する論理として示したものが、日清戦争の結果新たに日本が領有することとなった台湾を導く責任としての沖縄教育であった。奈良原は、一八九五年六月の沖縄県私立教育会総集会において次のような告辞を行った。

我県と一葦海水を隔つる台湾島は我版図に入れり。我県の如きは南方に僻在せる孤島にして從來世の注意を惹く少かりしも、忽ち東洋枢要の位置となり従て本県教育の上に一大責任を加へたり。(中略)抑我県の学事は内地各府県と同一軌に出づると雖も交通不便なるを以て、言語風俗習慣等自ら趣きを異にする所なきにあらず。望むらくは本会員諸子宜しく協同一致自今一段の熱心勉勵により教育を改良し益普及上進せしめ、東洋枢要の実を全ふすべき人物を養成することに力を尽されんことを。

こうして、沖縄人教員の自負心を刺激しながら、「言語風俗習慣等」が大和と異なることを強調し、大和化を主に学校で展開していくのである。

このように沖縄と台湾との序列化は、同化推進のために利用された。伊波の思想もこうした序列化から自由であったとはいえない。しかし、「台湾領有以後の沖縄への「同化」の論理は、沖縄人教員が中心となって、殊更に「日琉同祖論」によりながら、植民地台湾をテコにした「国民教育」を展開するものであった」[藤澤2000:221]という藤澤の見解には留保を付けておきたい。藤澤2000では伊波については論じられておらず、本稿で示すとおり、たしかに沖縄と台湾とを序列化していったとはいえ、伊波の「日琉同祖論」は、「同化」へとまっすぐに向かうものではないからである。